立山町歴史交流ステーション　令和５年度ミニ企画展

「飛騨の越中瀬戸焼伝承―神岡・山之村窯（やまのむら）―」展

飛騨市神岡町瀬戸は、かつて山之村地区と呼ばれた、標高1000m付近の隠れ里です。ここは隣接する越中・有峰から、大多和峠・唐尾峠をへて神岡町へ抜ける旧道上にあり、県境とは約４kmの距離です。

ここには、瀬戸系陶窯とされる単独窯跡があり、「山之村窯」と呼ばれています。窯を操業した陶工は、越中瀬戸で修業したとの伝承があり、陶工末裔とされる平田家に数点の陶器が伝わっています。

展示では、伝世品や窯跡で採集した陶器片・窯道具から、「山之村窯」の実像に迫ります。

謝辞　本展にあたり、次の方々からご教示・ご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平田金次郎　都竹清隆　高木好美　愛知県瀬戸市瀬戸蔵ミュージアム
岐阜県多治見市美濃焼ミュージアム　富山石文化研究所　立山町文化財保護審議委員会

瀬戸集落・山之村窯と背後の富山・岐阜県境の山々（西から）

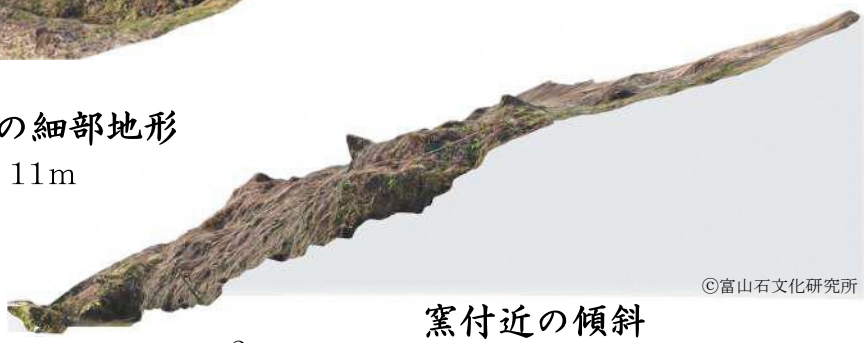
1　山之村窯（やまのむらかま）の概要

山之村窯は、瀬戸集落西側の山麓のなだらかな傾斜地にあり、標高は930mです。一帯の小字は「下瀬戸」で、山側は山林、窯付近から下は畑・水田となっています。

窯は連房式登窯（れんぼうしきのぼりがま）とみられ、一基だけが操業（そうぎょう）されました。窯のあった現地には、陶器片や窯道具、窯の構造物の一部が散布しており、窯の基底部は残っていると推定されます。規模などは不明です。

山之村窯（白丸）　左端は下之本集落方面

3Dデータによる窯跡の細部地形
点線が窯体部か？　左右約11m



窯付近の傾斜

2　窯で焼いた製品

平田家に伝わる窯製品は、完全な形のもの５点があります。このうち１点は九州の唐津製品、１点は尾張瀬戸製品と推定されます。

窯跡で採集した陶器片によれば、この窯で焼いたのは、碗・湯呑・皿・鉢・徳利・長頸壺・甕または壺があり、緑釉・灰釉製品が主体です。他に染付鉢があります。

3　窯道具

窯の内外で使われた各種陶製用具（窯道具）が平田家と窯跡にありました。

匣鉢は、皿や碗など小型の製品を入れた容器で、直接積み重ねて焼きました。平底と丸底があり、製品の高さ・種類で使い分けました。たくさん見つかっており、匣鉢積みの方法で焼成していたようです。

楕円形の匣鉢蓋は、匣鉢の一番上に置き、製品を直接置いたものです。

紐ドチ（ハリ）やにぎりドチは、匣鉢を安定させる道具です。

円柱状の焼台は、匣鉢の下に置いたものです。

直方体の箱クレは、窯の支柱の一部として使われました。

飛騨市神岡町山之村窯　伝世品・出土陶器・窯道具

トピック　**珍しい整形クレ**

楕円体の整形クレは、周囲を指で丸く整え、一面に指先でくぼみを数個作っています。まっすぐ突き刺したり、斜めに刺したりします。他の面には平らにした部分もあります。窯内で使用した道具と考えられますが、瀬戸・美濃・越中瀬戸のいずれにも類例がなく、どのように使ったかは不明です。

整形クレの一つ

4　山之村窯の特色

この窯は、江戸後期から明治前期頃に操業されました。窯業地から遠く離れた単独窯にもかかわらず、熟練した製陶技術で作られており、本格的な修業を行った陶工だったことがわかります。緑釉・灰釉が主体となる製品は、美濃焼と近いかもしれません。染付にも挑戦するなど、多様な陶器作りを試みています。厚く光沢のある透明釉がこの窯の特色といえます。

窯作りを一からはじめ、窯道具も独自に考案するなど、すべて一人で行った平田陶工の艶やかな製品は、山之村の人々に親しまれたことでしょう。

●越中瀬戸焼との関係は？

この窯が操業を始めたころ、越中瀬戸焼は衰退し、小さな平地窯（胴窯）で細々と瓦陶兼業で操業していたといいます。

当時の主流は、黒・褐色の鉄釉製品であり、わずかに灰釉や黄瀬戸風の釉薬を使ったものもあります。

釉薬の使い方、窯道具の形態、窯形態などの違いからみて、越中瀬戸焼のあり方とはやや異なるといえそうです。

なぜ越中瀬戸焼とのむすびつきが代々伝承されたのか？今後も平田陶工の声に耳を傾けていく必要があると感じました。

江戸後期以降の越中瀬戸焼

ミニ企画展「飛騨の越中瀬戸焼伝承―神岡・山之村窯―」展　展示解説
会期　令和５年６月３日～同７月 31 日
発行日　令和５年６月３日

富山県立山町歴史交流ステーション 日なた
〒930-3213 富山県立山町日中上野 83
TEL　076-462-2387
E-mail：tateyama-hinata@ma.net3-tv.net